広告　企画・制作　LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

# 南国醸し出す「チョウ柄」のアロハポロを新たな宮崎の顔に。

小松 孝英　宮崎県／アーティスト

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」（主催・レクサス）は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

## レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援

プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、隈研吾氏（建築家／東京大学教授）、グエナエル・ニコラ氏（デザイナー）、清川あさみ氏（アーティスト）、生駒芳子氏（ファッション・ジャーナリスト／アート・プロデューサー）、下川一哉氏（意と匠研究所）らをサポートメンバーに発足。第一回となる今回は、全国47都道府県から地域推薦、一般公募合わせて52名の若き匠が選出された。

昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを重ね、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトづくりに取り組んだ。「本当に欲しくなるプロダクトか？」「地域のオリジナリティーはあるか？」「コンセプトやターゲットは明確か？」など、サポートメンバーから真剣なアドバイスが行われ、匠は約一年の試行錯誤を経てプロダクトを完成させた。

下川氏とエリアコンサルティングにて

1月18日に都内で行われたイベントでは全国の百貨店、セレクトショップのバイヤー、メディア、デザイン関係者などに向けてプレゼンテーションを実施。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなるチャンスを手にした。

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。日本のモノづくりを支え発展させ、そこから新しい価値を生み出そうとしているレクサスのブランド思想の1つである「一律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。宮崎県選出の匠、アーティスト・小松孝英さんの思いと、完成したプロダクトを紹介する。

1月18日、プレゼンテーションにて

スーパーバイザー
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科卒。「料理の鉄人」や「ニューデザインパラダイス」、映画「おくりびと」など数多くのヒット作品の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。

## 生態系変化危惧し鮮やかな絵で表現

延岡市出身の小松さん。自然に囲まれた幼少期から動植物への関心が強かった。採集にとどまらず、その視線は昆虫のフォルムにも向けられた。中でもチョウに対しては「だれがこんなデザインをしたのだろう」「色使いがすごい」。こうした好奇心が小松さんに筆を握らせ、チョウをモチーフとしてカンバスに向かい始めた。

作品プレゼンする小松さん

テーマは生物の多様性や生態系の変化。背景に金箔を使う琳派（りんぱ）の技法を取り入れ、色鮮やかで繊細なチョウを描く。都市部でなくとも感じる生態系の変化を伝統の手法で表現し、「変わっていく日本の自然、生態系を知ってほしい」との思いを込める。

2006年からは海外にも活躍の場を広げ、現在は中国やシンガポールなど8カ国で個展を開催したりアートショーに出品したりしている。

今回のプロジェクトでは代表作の一つ「羽籠（はねかご）」を大胆にあしらったポロシャツ制作を発案した。県内では夏になるとクールビズの一環で、アロハシャツを着る官公庁や事業所が目立つ。小松さんは「宮崎イコールハワイ？　だったらチョウが新しい宮崎柄になり得ないか。ポロシャツだったらゴルフウエアとしても着用できる」との思いから、「アロハポロシャツ『ミヤザ着』」と命名し制作をスタートさせた。ジャケットを羽織ってもいいように襟の先端をボタンで留めるボタンダウン式を採用した。

バイヤーに説明する小松さん（右）

## 「宮崎産」こだわり ボタン、生地選出

「宮崎柄」を目指すからには〝メードイン宮崎〟を追求した。ボタンの素材に宮崎が誇る飫肥杉を使用。鍵を握る生地の選定は、知人でアパレル事業を手掛ける赤平聖茂さん＝宮崎市＝の支援を受けた。

生地に求めたのは、色鮮やかで繊細なチョウの細部を最大限に再現でき、伸縮性と速乾性に富んでいること。さらにシンプルな模様のTシャツのようなプリントではなく、チョウ柄をプリントした生地で仕立てる「総柄」にこだわった。小松さんの出身地・延岡市が発祥の旭化成の協力も得て試行錯誤を重ねた。

エリア・コンサルティングで、宮崎市に小松さんのアトリエを訪ねたサポートメンバーの下川氏は縫製前の生地を手に「生態系への思いをもっとアピールしては」と助言。『生態系』のキーワードで、ある生物が思い浮かんだ。「水田に行くと赤い卵を付けたタニシがいっぱいいるでしょ。あれを見るとイクラを思い出すんですよね」。フォルムにこだわる小松さんならではの発言にアトリエに笑いが起きた。そして、表地はそのままに、裏地にデザインを施すことにした。外来種のジャンボタニシ（学名スクミリンゴガイ）をパターン化したデザインの中に、絶滅が危惧されるタガメをわずかに配したレイアウトで生態系の変化に警鐘を鳴らした。

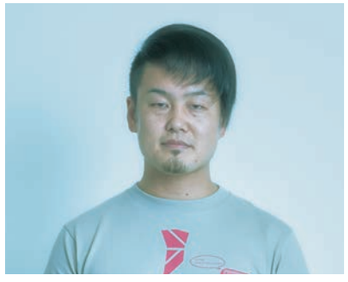
アトリエで制作された「延岡城址群蝶図」

## 宮崎柄願いプロダクトに

繊細なタッチでチョウに命が吹き込まれる

しかし、昨年11月、試作品を目にしたサポートメンバーから「着るのに（柄が）抵抗がある」と指摘された。そこで、柄が幾何学的な模様に近づくようチョウのサイズを大幅にダウン。華やかなデザインを活かし、スカーフも制作した。

完成プロダクト「アロハポロシャツ『ミヤザ着』」。
問い合わせ／P' MAS（ピーマス）☎0985（31）3524


小松 孝英
宮崎県／アーティスト

1979年宮崎県延岡市生まれ。九州デザイナー学院卒業。20代からロンドンやニューヨーク、香港など国内外で個展、アートフェアに出品。2010年には国連のCOP10生物多様性条約締約国会議に特別展示される。2010年、2011年、2015年アートフェア東京（国際フォーラム）出品。生態系をテーマに東京や海外のギャラリーと契約し、香港やシンガポールのArt Showなど主に海外で活動中。

## 初のアパレル手掛け 創作幅広がる手応え

アート業界に身を置き、一点物の作品制作を手掛けてきた小松さんにとって「量産スタイル」には抵抗もあったという。しかし、「レクサス」というブランドの発信力の大きさや新境地ともいえるステージで新たな自分を見つけられるのでは、との期待も込めてプロジェクトに参加した。

自身の創作活動が初めてアパレルと融合したことについて小松さんは「以前から気になっていた。今回、新たな挑戦をする機会をいただくことができました。チョウ柄をポロシャツ以外にも活用できないかなど、創作の幅が広がった」と語る。

プレゼンの最後でシャツを前に小松さんは「これはアパレルというよりは宮崎県産品です」と胸を張った。大好きな宮崎のために少しでも貢献したい―。小松さんの〝蝶戦〟はまだまだ続く。

身近にある豊かな自然が創作活動を支える

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT